JRPみえばん 百万石

53

1980-9

伊勢市古市町
東　洋介
百万石編集部

(51号 52号 53号の後記)

52号で 隆さんカッパの言っていることは実は―
去る8月のある日曜日、かんこ踊りの撮影で、鈴鹿と津の八つの面々が八太さんの実家のお寺の洞雲寺でご馳走になってきた思い出話です。

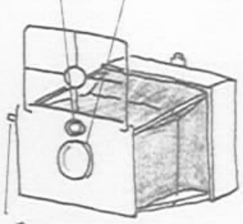
こんどは原稿がドバッと集ってきて編集部は目をシロクロ。でも喜び勇んでかきとばしました。原稿メ切日が9月2日なので、まだまだとびこんで来そう。

でも これだけいっぺんに郵送できると郵送料も 苦になりません。

＜カメラあれこれ昔話し＞　佐々 章

最初手にしたカメラは中学一年生の頃、兄からゆずってもらったドイツ製の弁当箱大の乾板使用の時代物。レンズはテッサーでよく撮れたが戦時中とて写真どころでなく、二、三回家族写真を撮っただけで家とともに戦災で消失。

次は、当時進駐軍がよく使っていた、ベークライト製の単玉レンズと百分の一のシャッターしかついていない、簡単きわまるアメリカ製のボックスカメラを闇市で手に入れたがフィルムも無い時代で、そのうちベークライトが割れて駄目にしてしまった。



ドイツ製の弁当箱大の
乾板使用の……
その思い出し図
(ヨーサン)

やっとカメラらしいカメラを手に入れたのは昭和二十六年の頃金七千五百円のリコーフレックス。これはその後カメラ界の寵児となり、しばらくの間二眼レフ時代をきずいた。実によく撮れるカメラだったが持ち運びが不便なため、小型カメラが欲しくなり、当時一番安価であったコニレットを愛用した。この頃からカラーフィルム スライド用が出まわりはじめた。

間もなく売り出されたのが、ワイドカメラの一時期を劃(かく)したオリンパスワイドで、この頃になると世の中も落ちついてきたのか、アサヒ一眼レフやキャノン等、高価なカメラも出はじめたが女房をくどいて買うのには高価すぎ、やっとフジカ35で辛棒した。

そのうちフィルムを2倍に使えるということで売り出されたのが、ハーフサイズのオリンパスペン。丁度子供の小さい頃でカラースライドをいっぱい作った。このカメラは形も小さく使い易いため シャッターのこわれるまで酷使した。

クルマもテレビも無い時代のこととて、まじめな遊びっ・は写真くらい。そのためか職場でもカメラ談議に花が咲くことも多かった。誰が一番早くキャノンを買うか、なんて真剣に競いあったものだ。

2年前にやっと念願のアサヒペンタックスMEを購入。物価高の時代とはいえ当時に比べるとカメラだけは安くて性能のいいものが出まわっているように思う。

家族写真や記録写真ばかりで「作品」なんていえるものは撮ったことがなかったが、生来カメラ好きなのか、おそまきながらJRPの末席をけがしながら ぼつぼつやっている次第である。

小河 真奈美

……それからしばらく不思議ふしぎの連続でよく首をかしげていたものです。学校にある暗室を自分のもののように好き勝手に使っていたものですから、高校を卒業した時はとても淋しい気がしたものです。

看護学校へ入学して写真部など全くないのにがっかりしましたが、それでも1年の夏休みにバイトをして道具をそろえました。

私の暗室はプレハブのかわいい小屋なのです。昼間は光が漏れてしまうので夜間のみしか焼けません。やっと造った暗室も、写真はちっとも上達しないし友だちもいないし、3年間殆ど使わずじまいでした。

JRPに入会してから私自身変ったと思うことは「写真をもっと撮らねば」と思うようになったことです。しかしそのわりにはフィルムの方がなかなか減っていきません。それは今までとてもとても時間がたりなかったからです。仕事と自動車学校と自炊の繰りかえしが私の精いっぱいの日々でした。
(これは私の いいわけかな)

それでも賞めてやって下さい、土門先生の本だけは7冊読ませていただきました。

7冊といっても小さいのばっかりですから たいしたことはありませんが、「風貌」とその「続風貌」と「続々風貌」それから「生きることと死ぬこと」とその「続――」それから「写真作法」 そして8月に入ってから「土門拳とその周囲の証言」を読みました。

やっぱりJRPの人達がみんなそうであるように私も彼を尊敬せずにはいられないのです。

さてまた私の現状に話をもどしますと、毎日暮している寮から月に1回、家にある暗室へ向っていくだけではダメですね。

いつも自分の生活している場所に暗室があればどんなにかいいのにと思うのです。

いつかきっと そうなることを楽しみにしながらがんばっていきたいと思っています。

＜カメラとα(アルファ)＞　やぎゅう

ゴルフ場へさしかかる手前を 左の観音道に入るとなんとなくほっとする。ゴルフと石佛が隣りあっている奇妙な組み合せがいつも気になると同時に、ゴルフ場への道がメインで石山へ行くにはそこを右折する危険(?)がある。「僕は観音へ行くのだぞ!」と無言の叫びをあげる。やがて蝉しぐれの木立に包まれた石山につくとたいていは誰もいない。もう一度ほっとする。

「信心?」。とんでもない。カメラなんです。いや、カメラプラスαがあるようです。僕はこのαを考えてみたいのだ。

昔、ここに浄蓮寺という寺が建っていた。おそらくそれ以前に阿弥陀と地蔵の磨崖佛が彫られたのだろう。いずれも数メートルの大きさである。この片田舎の奥やまにかなりの労作と費用をついやして、何のためだったのだろう。隣の広大なゴルフ場はもちろん儲けのためである。

雨乞いが行われたと立札に説明してあるが、それだけでもあるまい。この二つの像はいずれも鎌倉時代のものだ。法然、親鸞、栄西、道元、日蓮佛道の各派が相ついで生まれた時代、戦国の乱世、封建時代の幕あけ。民衆は威力ある佛を必要としたにちがいない。

こちらの仏は村人たちの共同の祈念心が こもってはる。

こちらの仏は、個々の人の心しかこもっていはらない。

あとの佛たちは幕末から大正までのもので、さすがに彫り方も容姿も稚である。僕の感じでは、前の二佛は村人たちの共同の祈念心がこもっているようだが、後者の佛たちは個々のひとそれぞれと小さくなってしまっている。それでも信仰盛んな頃はおそらく善男善女がこの石山の諸佛を一つ一つ尋ね祈ったにちがいない。

今でも、たまにローソク灯明のあとを見るが、その人たちの歩みより速く佛の肌は風化し、はがれおちていく。

僕のプラスαは どうもこのような漠とした歴史の背景にひかれているようでもあり、山をひと廻りしていると、ふと岩かげから人でもあるような大小さまざまな佛に出合う一種のやすらぎにあるのかもしれない。 それにしても私が、写真づくりをめざしていなかったら、こんなに度々この石山にやってこなかったであろう。